

ぱちんこ 言葉物語

16

ジグマ

今回の言葉物語は「ジグマ」という言葉をテーマにしたいと思います。

昨今のパチンコ・パチスロ営業の中ではかなり少数派となってきたこの言葉には、業界の過去から現在・そして未来のユーザー達の姿がほんやりと垣間見えてきます。

言いえて妙、語源・地熊

比較的業界年数の長い方であれば馴染みのあるこの言葉は造語によるものと言われています。諸説あるようですが、語源としては「地熊」。熊は定地に固有の縄張りを保有することから由来しているという説がもつとも有力と言われています。具体的には、

- ▼ 地元およびその周辺ホールを中心とした立ち回り
- ▼ メインホールには足繁く通う
- ▼ 徹底的に対象店舗の営業を研究し、店舗の「癖」を掴むといった特徴があると言えます。

一般のお客様から見ると「あの客はいつも出している」といった対象として見られるこ

ともある一方、店舗側からはそのような目線とともに例えばパチスロでは「高設定台を確実に出してくれる」といった面も少なからずあります。しかし、前述の問題からその扱い（こう言っつては失礼かも知れませんが）に苦慮した経験をお持ちの方もいらっしゃると思います。店舗によりその対応も異なるジグマ。現代では更に慎重に対応しなければならなくなりました。



田山幸憲氏が愛した「ナナシー」。現代に語り継がれる名機の一つ

少々昔話になりますが、今年の7月は田山幸憲氏の11回忌でした。田山氏は現在のパチンコ攻略雑誌の先駆者とも言えるべき方で、このジグマスタイルを実践していた方でもありました。氏の愛機は今のパチンコ機からすればべ

夕風とも言えるゲーム性の「ナナシー」（豊丸産業）。当然、そのような立ち回りが多かったので、氏の書いていたコラムは昨今の攻略雑誌で飛び交っている言葉からはかけ離れています。

しかし等身大で人生そのもので、そして「古き良き大衆娯楽のパチンコ」を謳歌しているかのようだったと記憶しております。今、そのような文章を垣間見ることのできる事はかなり少なくなり、如何にホールとの戦いを制するか、勝利を上乗せするかに終始した論調に変化してきているように感じます。データカウンターを手に持ち、計算アプリで設定期待値を0.01%まで目を血走らせる現在のユーザーたちを氏はどう天国からご覧になっているのでしょうか。

阿吽の呼吸、駆け引き

このように過去では店舗の営業予定上における「遊び」を活用し、店舗としてジグマとの間の言わずもがなの呼吸感で立ち回れる方は確かに存在していました。私の知る限りでジグマの立ち回りを具体的に言う「羽根物等定量制機種の打ち止めは1回で終わり」「どんなに勝っても夕方以降は打たず」に他のユーザーに譲る「ゲンを担ぐ」

「無用なトラブルは絶対にしない」、言うなれば「空気」のような存在。

でもその人が居ないと店舗の人や他の常連さんはちよつと気になる。そんな存在だったではないでしょうか。そして当然彼らジグマもパチプロですから、定期的な勝利は不可欠です。しかし、現代では有益な情報はすぐにネットを通じて流れてしまうようになり、このようなスタイルの立ち回りは非常に厳しい時代になってきました。

ネットと共存はムリ

情報は瞬時に業界内を駆け巡り始めます。そして現在プロと呼ばれる人たちの行動半径は、隣県はもちろん新幹線も使う時代です。「そのような人が多くなってきた」とブランドオープンを経験した店舗社員は言い、営業をどう組み立てるかで頭を悩ませます。

ジグマが有益な情報を得たとしても、ネットを通じて初めてその店に行く人にすら簡単に奪われてしまうのが当たり前の情報戦時代です。そう、その「場所」を奪われる姿は、今まで細々と自給自足をしていたのに人間たちに攻め込まれ「場所」を追われた実際の熊達の姿にどこか似ているように感じられます。

（大和田敏男）

微妙だけど、必要でもあった